

## 論文の要旨

論文題目 教育文法としての現代日本語記述  
イ形容詞の実現態を手がかりに  
氏名 小林 ミナ  
学位 博士(文学)  
授与年月日 平成21年3月25日

### 1. 本論文の目的

本論文は、日本語教育における「教育文法(pedagogical/pedagogic grammar)」について、理論研究と事例研究の2つの側面から考察するものである。具体的には、次の2点を目的とする。

目的(1): 教育文法を文法研究の一つとして位置付け、理論的枠組みを明らかにする。

目的(2): 上の目的(1)を踏まえて、現代日本語を実現態(the actual)の観点から記述する。

### 2. 本論文の構成

本論文は、「序論」「本論」「結論」の、大きく3つの部分から成る。

「序論」では、問題提起を行い、本論文の目的と構成を述べた。

「本論」は、全8章から成る。前半の4章(第1章~第4章)は、目的(1)に対応しており、教育文法を理論的な側面から考察した。後半の4章(第5章~第8章)は、目的(2)に対応しており、教育文法に関する事例研究を行った。事例研究では、実現態(the actual)の観点からイ形容詞を観察、記述した。

そして最後に「結論」において、本論文での主張をまとめた。

### 3. 本論文の概要

第1部では、目的(1)のために、教育文法について理論的な側面から考察を行った。

第1章では、日本語教育の文法教育が、次のような流れをもった文法教育観を背景にしていることを指摘した。

初級(3・4級レベル)では、  
日本語の基本的な文型に関わる要素をひと通り教える。

中級(2級レベル)以降では、複合辞や機能語を教える。

そして、このような文法シラバスが所与のものとなされ、コミュニケーションな要素を加算式に取りこんでいくシラバス・デザインとなっているため、とくに初級段階のシラバスは、質的にも量的にも拡大する一方であることを述べた。

第2章では、そのようなシラバス・デザインが、日本語学の文法研究と日本語教育の文法教育が、「基礎と応用」という関係にあることに由来していることを指摘し、教育文法を「日本語学の応用」ではなく、「複数の関連領域の成果を踏まえた複合体」としてとらえるべきであることを主張した。それを踏まえて、日本語の構造、体系ではなく、ことばの使い手である学習者の視点に立った文法シラバスの構築が急務であることを述べた。

第3章では、文法教育の土台となる文法そのものを見直すためには、コーパスを用いて丹念に使用の実態を見ていくことが、有効な手段の1つになり得ることを述べた。それは、「内省や直観に頼らない言語記述が可能になる」「言語の実現態に基づいたシラバス・デザインが可能になる」という2つの意味においてである。後者は同時に、文法教育が土台とする文法観、文法教育観が、静的で規範的なものから、動的で相互構築的なものへとパラダイム・シフトを遂げることを意味するものである。

第4章では、第2部で行う事例研究としてイ形容詞を取りあげることについて、日本語教育における意義を考察した。

第2部では、目的(2)のために、イ形容詞の実現態について事例研究を行った。

第5章では、事例研究で用いるコーパスの特徴を紹介した。

第6章では、次の2つの研究課題を設定し、イ形容詞と丁寧体の述語否定形(「ません」と「ないです」)の共起を考察した。

研究課題1:「ません」と「ないです」との共起において、イ形容詞だけが他の品詞とは異なるふるまいを見せるか。

研究課題2:イ形容詞以外の他品詞も含めて、「ません」と「ないです」には、使い分けがあるか。あるとすれば、それはどのようなものか。

そして、次の知見を得た。

知見1.日常会話では「ません」より「ないです」の使用が優勢(67.7%)である。その傾向について、イ形容詞と他の品詞とに違いは見られなかった。

知見2.「引用節外では「ないです」」「引用節内では「ません」という使い分けがある。

第7章と第8章では、イ形容詞の実現態について「活用形ごとの使用頻度」「使われたイ形容詞」の2つの観点から見た。第7章では、次の研究課題として設定し、日常会話コーパスを対象に考察を行った。

研究課題3:日常会話で使われたイ形容詞の活用形には、何らかの偏りがあるか。

研究課題4:もしあるなら、それはどのような偏りか。

そして、次の知見を得た。

知見1.異なりで113語のイ形容詞が見られた。

知見2.頻繁に使われるのは、113語のうち、ごく限られたイ形容詞であった。上位2語

(「いい」「ない」)だけで63.9%，上位10語では全体の79.5%を占める。

知見3.その一方で，113語のおよそ半数(53語)が，1回(38語)ないし2回(15語)しか使われていなかった。

知見4.全113語のうち，70語(61.9%)が初級(3・4級)の語彙であった。上位10語は，10位の「しょうがない」を除いて，すべて初級(3・4級)の語彙であった。

知見5.「いい(な-)」「悪い」には，属性形容詞ではなく感情形容詞としての用法が多数見られた。

知見6.「よかった」「すごい」には，一語文として，いわば感動詞のように使われた用法が見られた。

第8章では，次の研究課題として設定し，『白書』コーパスを対象に考察を行った。

研究課題5：『白書』で使われたイ形容詞の活用形には，何らかの偏りがあるか。

研究課題6：もしあるなら，それはどのような偏りか。

研究課題7：上記の偏りは，日常会話と同じか。

そして，次の知見を得た。

知見7.異なりで43語のイ形容詞が見られた。

知見8.頻繁に使われるのは，43語のうち，ごく限られたイ形容詞であった。上位5語(「多い」「ない」「大きい」「高い」「少ない」)だけで79.5%，上位10語では全体の94.5%を占める。

知見9.全43語のうち，28語(65.1%)が初級(3・4級)の語彙であった。上位10語に限っても，「著しい」「望ましい」を除いて，すべて初級(3・4級)の語彙であった。

知見10.「ない」は，「非過去・肯定」(178例)と「過去・肯定」(152例)が，ほぼ同じ頻度で使われている。

知見11.「少ない」は，「非過去・肯定」(65例)と「非過去・否定」(62例)が，ほぼ同じ頻度で使われている。さらに，「非過去・否定」の「少なくない」については，「も」と共起し「も少なくない」という形で使われる用例が多かった。

そして，知見3.-11.から，以下の結論を述べた。

- ・ 日常会話と『白書』については，「活用形ごとの使用頻度」「使われたイ形容詞」の2つの点において，大きくは同じ傾向を示した。しかし，日常会話のほうが「非過去・肯定」により強い偏りが見られた。

- ・ この偏りは，『白書』において，「ない」の「過去・肯定」(=なかった)，「少ない」の「非過去・否定」(=少なくない)がきわめて高頻度で使われていたために生じたものである。

- ・ 日常会話で使われた「ない」と「少ない」には，このような偏りは見られず，「非過去・肯定」の用例が圧倒的に多かった。

これを踏まえて，次の3点を述べ，本論文の結論とした。

- ・ 規範から記述へ

- ・ 可能態から実現態へ
- ・ 文法教育と語彙教育の有機的な連携を